社会科学習指導案

４年　　男子４名　女子４名　計 ８ 名
知覧町立浮辺小学校　教諭　宮内隆靖

１　小単元名　　南薩の恩人　仲覚兵衛

（１）　小単元の価値

子どもたちは，これまでに大単元「昔のくらしとまちづくり」で「昔の道具やその頃のくらしの様子」について調べてきている。その学習の中で，人々の生活の移り変わりや過去の生活における人々の知恵を見直しつつある。また，年中行事に込められた地域の人々の願いも感じとっている。

本小単元「南薩の恩人　仲覚兵衛」においては，郷土の先人である仲覚兵衛の功績を追究する活動を通して，南薩の人々の暮らしが向上したことを学ぶことで，自分たちの暮らす町に愛着と誇りをもつことができるものと考える。また，骨粉肥料の開発に工夫や努力を重ねた覚兵衛の生き方に共感しながら，自分の生活とのかかわりを考える態度を育成しようとするものである。さらに，追究活動の中で，必要な資料を活用したり，聞き取り調査をしたりする力も高められるものと考える。以上のことから，地域の歴史や人々の願いについて芽生えつつある子どもたちの関心を更に高めることのできる教材であると考える。

（２）　指導の基本的な立場

仲覚兵衛は知覧町門之浦に生まれ，海運業を営んでいた。骨粉の効能に目を付け，これを大阪から大量に運び，骨粉肥料として開発した。これにより，南薩地方の菜種の生産高は倍増し，一大特産物となった。知覧領主はその功績を称え，天明６年（1786）に禄を与え，名字帯刀を許した。覚兵衛は寛政 12 年（1800）に 86 歳で亡くなったが，その偉大な功績にもかかわらず，その後 120 年余り遺徳を顕彰されることがなかった。現在は，明治 23 年に顕彰された石碑が，知覧町立松ヶ浦小学校横にたたずんでいる。

導入の段階では，地域の人々の生活を向上させた仲覚兵衛という人が町内にいたという事実から，未知なる人物「覚兵衛」を，より身近な半未知の人物としてとらえられるように資料提示をしていきたい。そのことから，子どもの教材に対する関心も高まるものと思われる。

調べる段階では，まず，自作の資料集に基づき机上の追究活動を進めていきたい。さらに，骨粉肥料工場跡や覚兵衛の屋敷跡・顕彰碑を見学調査したり，古老の話を聞いたりする活動を設定し，覚兵衛という人物により興味をもたせたい。

調べたことをまとめ，発表し合う活動を設けることで，覚兵衛がなぜ「南薩の恩人」と呼ばれているのか，そこにどのような苦心や努力があったのかについて，考えを深めていきたい。

生かす段階では，「南薩の恩人　仲覚兵衛」に表彰状を書くことで，覚兵衛の功績を再認識し，自分たちの暮らす地域に愛着と誇りをもたせるようにしたい。その際，専門家（学芸員など）の意見を聞き，この小単元での学びを確かなものにしたい。

このような学習を通して，子どもたちは自分たちの暮らす町に対する誇りと愛情をもち，自分なりにその発展を願う態度が育成されるものと考える。さらに，仲覚兵衛の生き方に共感し，

自らの生き方にも生かすことができると考える。

（３）　児童の実態　（質問紙法，実施人数８名）

1　自分のくらす町で自まんできるものは何ですか。

お茶（４）　特攻祈念館（１）　ねぷた祭（１）
いも（１）　ミュージアム知覧（１）　ない（１）

2　自分たちのくらす町について思っていること。

いいところ（４）　すごい（２）　わるい（２）
行事がある（１）　人がやさしい（１）　平和（１）
お茶がおいしい（１）　いなか（１）

3　肥料は何からできているか知っていますか。

動物の糞（５）　知らない（２）　生ごみ（２）

4　昔の人について調べたい時は，どうやって調べますか。

インタビュー（８）　アンケート（５）　本（２）
博物館（２）

5　町内に港がある場所を知っていますか。

知らない（４）　松ヶ浦（２）　枕崎（１）
頴娃（１）

本学級の子どもたちは，自分たちの町に対して，概ね好感をもっているといえる。特に，今までの学習や体験から，「お茶」や「平和」についての意識が高い。

肥料の原料については，ほとんどが「動物の糞」と回答し，「動物の骨」という発想はみられなかった。

昔の人について調べる方法については，「インタビュー」と全員が回答している。これは，前小単元の学習を想起したものと思われる。

町内で港（海）がある場所を正確に回答したのは２名で，ほとんどが，町内に海があるという認識に欠けている。

このように，自分たちの暮らす町に好感をもち，町内の偉人についての視点をもたない子どもたちに，地域に貢献した人物の功績を伝えていくことは，郷土に対する愛情を深める意味でも大変価値があることと言える。調べ活動の際には，質問３・４・５からの考察を十分生かして進めていく必要がある。

３　小単元の目標

（１）覚兵衛の働きについて関心をもち，意欲的に調べたり考えたりすることを通して，地域社会に対する誇りと愛情をもち，その発展を願うことができる。
（社会的事象への関心・意欲・態度）

（２）仲覚兵衛の働きについて問題意識をもち，学習の見通しをもって追究・解決したことを基に，その働きや苦心を考え，適切に判断することができる。　（社会的な思考・判断）

（３）仲覚兵衛の願いや工夫・努力，苦心，地域の人々の生活が向上したことなどを具体的に調べ，その過程や結果を分かりやすく表現することができる。
（観察・資料活用の技能・表現）

（４）仲覚兵衛の願いや工夫や努力，地域の人々の生活が向上したことなどが分かることができる。　（社会的事象についての知識・理解）

4　小単元の構造

〈中心概念〉　〈具体的事項〉　〈具体的内容〉

仲覚兵衛は、工夫や努力を重ねて開発した骨粉肥料を、地域の人々のために用い、その生活を向上させた。これらの功績から「南薩の恩人」と呼ばれている。

- 仲覚兵衛は工夫と努力を重ねて骨粉肥料を開発し，普及した。
  - ・仲覚兵衛
  - ・骨粉肥料
  - ・イサバ船
  - ・開発の障害
- 仲覚兵衛の開発した骨粉肥料のおかげで，地域の人々の生活が向上した。その功績を称え，「南薩の恩人」と呼ばれている。
  - ・菜種の生産性向上
  - ・南薩の土質
  - ・顕彰碑

5　指導計画（全 10 時間）

過程	主な学習活動	時間	資料・地域素材	具体的な支援
つかむ	1　「南薩の恩人　仲覚兵衛」について学習問題を設定する。 **骨粉肥料を作った仲覚兵衛が，「南薩の恩人」と言われたひみつをさぐろう！** 2　学習問題を基に追究の柱を立てる。 ○　どうして骨粉肥料を作ることになったのだろう。 ○　どうして「南薩の恩人」と呼ばれたのだろう。 3　学習計画について話し合う。	1	写真資料 「生誕の地」 「顕彰碑」 「知覧町地図」	○　4 枚の写真資料「生誕の地（屋敷跡）」（遠→近）を生かして，「どんな人が住んでいたのか。」「場所はどこか。」というクイズ形式で意欲を喚起する。 ○　説明したキーワードを生かして学習問題が立てられるように助言する。 ○　学習問題への予想から追究の柱を立て，まとめ方など学習計画も話し合わせる。
調べる	4　資料集を活用し，ノートに調べていく。 5　調べたことを基に，見学や取材をする。 ・　骨粉工場跡，生誕地，顕彰碑（見学） ・　土地の古老（取材） 【話を聞く→質問】	5	自作資料 写真資料 【見学】 「骨粉工場跡」 「生誕の地」 「顕彰碑」 【人材登用】 古老･学芸員	○　資料集から，基本的な事項をノートにまとめる。まとめられない子には，個別に支援する。 ○　学習計画の時に話し合われた見学計画に基づき，見学や取材を安全に行えるように配慮する。質問事項を事前に整理して，渡しておく。

まとめる	6　調べたことを基に分かりやすくまとめる。 7　発表し合い，学習問題のまとめをする。 **仲覚兵衛は苦労や努力を重ねて骨粉肥料を開発した。 南薩地方の人々は，菜種などがたくさんとれるようになり，くらしも豊かになった。覚兵衛の亡くなった 120 年後，けんしょう碑が建てられ，南薩の恩人と言われた。**	2	新聞 絵本 紙芝居	○　グループごとに，思いを生かしたまとめ方ができるように支援する。 ○　中心概念に近づくような学習問題の答えが引き出されるように助言する。
生かす	8　仲覚兵衛の功績を称える表彰状を書き，発表する。 ・　学芸員の方に協力をいただき，アドバイスをもらう。 9　これまでの学習を振り返り反省する。	2	ワークシート （表彰状） 【人材登用】 ※　学芸員	○　覚兵衛の功績や苦労などを記入しながら表彰状が出来上がるようなワークシートを準備する。 ○　自己評価カードや評価問題を利用して学習を振り返る。

(1)　多様な学習活動を取り入れた学習過程で授業を組み立てる

１小単元 1 サイクルの学習過程の中に，体験的活動（作業・見学・発表）など多様な学習活動を取り入れた。

①　つかむ段階において

プロジェクターや写真で提示された画像資料を見せながら，クイズ形式の質問の答えをノートに記入していく。書く作業を積み重ねながら情報を蓄え，学習問題へつながる問いをもつことができる。

〈↑第 1 時の板書〉

〈提示した写真の一部→〉

②　調べる段階において

学習問題・追究の柱について，自作資料集を基に調べ学習を進め，仲覚兵衛の功績や苦労について基礎的知識を固める。

その後，計画に基づき，骨粉肥料工場跡・生誕地跡・顕彰碑の見学活動を行う。実際に見学した際には，学芸員に同行していただき，質問をしながら見学することができた。また，見学日の前日に学芸員と打ち合わせをし，子どもたちのノートを

見せて，学習の進捗状況を把握してもらった。

〈↑仲覚兵衛屋敷跡見学の様子〉　**〈↑顕彰碑見学・聞き取りの様子〉**

③　まとめ・生かす段階において

まとめる段階では，今までの学習（ノートにまとめたものなど）を生かし，自分でまとめたい方法（新聞・絵本・紙芝居）を決定してまとめた。

生かす段階では，仲覚兵衛に表彰状を書く活動を設定し，発表した。博物館の学芸員にも参観してもらい，感想・意見をいただいた。

また，学芸員の方から，「子どもたちの学習の成果を博物館で『仲覚兵衛展』として展示してもよい。」という，ありがたいお話をいただいた。子どもたちのまとめや発表の意欲も高まった。

〈↑子どもの作品(新聞)〉

〈↑学芸員の方との学び〉　**〈↑まとめ作品発表の様子〉**

(2)　評価を指導に生かす

子どもたち一人一人が意欲的に学習に取り組み，学びを確かなものにするための評価方法について，以下のことに取り組んだ。

①　評価規準の設定

社会科の目標，学年（３・４年）の目標，小単元の目標を分析し，簡単な評価規準を設定（国立教育政策研究所のものを参考に）し，表にして活用した。評価規準を

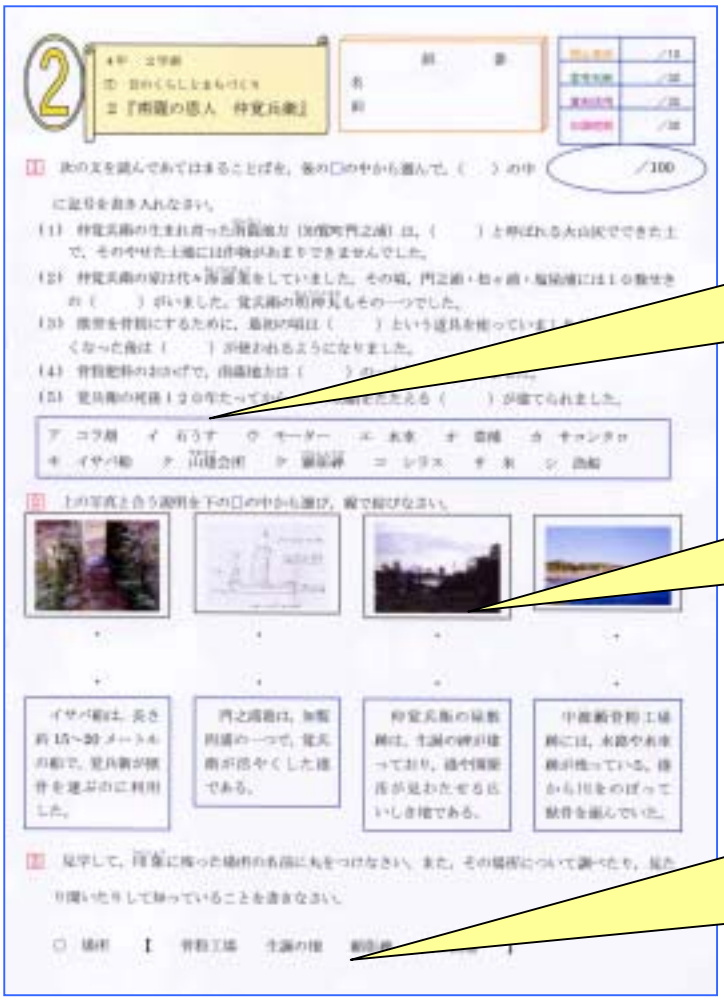
設定したことで，子どもの学習活動の様子を具体的に見取ることができ，次の授業で助言や支援に生かすことができた。

② 自己評価カード

自己評価カードを作成し，学習過程ごとに振り返らせるようにした。子ども自身が自分の学習の進み具合を確かめたりするなど，学習のガイドとしても利用した。

③ 評価問題の工夫

指導と評価の一体化ということから，指導してきたことや子どもたちの意見や質問等を生かした評価問題の作成を心がけた。



資料集の内容から子どものノートに出てきた重要語句を選択問題として出題した。知識理解問題の苦手な子どももよくできていた。

見学活動の時に見た場面を，そのまま問題に使っているので，子どもたちも学んだことを思い出しやすかったようだ。

意欲・関心・態度の問題として，見学で心に残った場所やそこについて知っていることを書かせる問題を出題した。複数回答している子も半数を超えた。

7 考察

(1) 地域素材を生かした社会科授業の意義

① 仮説①【地域素材の教材化】から

「地域素材を教材化するためには，教師自身が地域を知ることが大切である。」とよく言われるが，実際に教材化を図る過程で，「知らない地域素材がこんなにもあるのか。」と自分でも驚くほどであった。特に，専門家である博物館の学芸員の方との数回の打ち合わせによって，教材化の可能性を秘めた地域素材があることを知った。

また，子どもたちの実態に応じて資料集や資料を加工したことで，子どもたちも無理なく効率的に調べ学習を進めることができた。たくさんの資料の中から精選して資料を提示したことで，意欲が途切れることなく追究することができた。

② 仮説②【体験的学習を取り入れた学習過程の工夫】から

見学活動やゲストを招いての発表活動，まとめの作品づくりなど作業的・体験的活動を取り入れた学習過程で授業を進めたことにより，五感で地域を感じ，学ぶことができた。特に，実際に見学に行ったことで，「結構畑が多いね。」「大きな港が近くにあったんだね。」など，授業の伏線として必要な共通体験ができたことがよかった。授業前と授業後の実態調査を比べると，授業後には「知覧町で自慢できるもの」の項目に書いた言葉の数が増えて，「自分たちのくらしている町について思っていること」の項目によい印象の言葉が並んでいた。郷土への知識・理解の高まりに比例して，郷土への愛着も高まったようである。

③ 仮説③【自己評価を取り入れた評価の工夫】から

評価規準をもって教材化に当たり，子どもたちの様子を次の授業に生かしながら進めることができた。また，教師自身も単元のねらいからぶれることなく指導に当たることができた。また，子どもたちは自己評価を通して，学び方が定着してきた。評価問題も子どもたちの実態，授業の様子を取り入れて作成した結果，96.6 点という平均点だった。知識・理解の定着がいつも課題になっていたが，授業と評価問題が直結していれば，結果が出てくるのだと分かった。

④ 若干の考察

初めて地域素材を単元全体で教材化し，実践した。強い思い入れと比例した成果が得られたかどうか疑問は残るが，「他にも教材化できないか。」という目をもって地域を見るようになったことと，「授業を通してみないと何もはっきりしない。」ということが分かった。子どもたちの生き生きとした学習態度と作品群，テストでの結果が今回の実践の褒美になった。反面，評価問題の客観性等の課題もみえてきた。

(2) 研究のまとめ

郷土の先人の功績を探る社会科学習を教材化し実践研究した成果は，以下の通りである。

① 地域素材を教材化する場合は，教材として適した内容であるか，教科の目標に照らして吟味する。

② 教材化の際には，資料集や評価問題，その他の資料も含めて実態に合わせて加工し開発した方が，学ぶ意欲が高まり子どもたちが単元のねらいに近づく。

③ 体験的な活動が地域学習を活性化させる。

④ 郷土についての知識が増えると理解が深まり，郷土への愛着が強くなる。

⑤ 教材化したものは原石と考え，授業を通して検証していく必要がある。

8 おわりに

先人の偉業やその苦労を追究することを通して地域学習を進めてきたが，今回子どもたちの獲得した知識や小さな変容が，「郷土に対する誇りと愛情」という態度面につながっていくもの

と思う。この子どもたちの小さな変容を励みにして，これからも郷土に誇りと愛情をもつことのできる子どもの育成に向け，更に研究を深めていきたい。